



馬瀬芳知

Yoshinori Mase
 1932年 神戸に生まれる
 1956年 (株)平田建築構造研究入社
 1969年 (株)馬瀬構造設計事務所代表取締役
 現在に至る

小学校時代の思い出

My elementary school days

五年生（昭和18年～19年）のころ

担任は三宅得之（男）先生で渾名は鼻眼鏡。同じクラスには少数ではあるが白系ロシア人、台湾人、朝鮮人、支那人などがいた。

戦況も旗色が悪くなり芳しくないニュースが流れるようになった。連合艦隊司令長官 山本五十六大將戦死（18.4.18）、アッツ島守備隊玉砕（18.5.29）など。

そして本土空襲が避けられなくなったのか、まず「家屋疎開」と称して、主に木造家屋の取り壊しが市内のあちらこちらで行なわれた。これは空襲時に重要建物を類焼から守るため、隣接する木造家屋などが対象となった。対象となる家屋は御上の命により強制的に撤去させられた。また隣組の防空訓練も盛んに行われるようになった。服装は男は鉄兜にゲートル、女は防空頭巾にモンペといった出で立ちで臨んだ。男は主に消火訓練で、女は負傷者に対する介護訓練であった。

学校でも防空訓練を行なうようになった。大人達と違い避難訓練だった。登校中、下校中そして授業中に空襲があったときにどう行動するか、といったことだった。防空頭巾の携帯が義務付けられ、登下校時には肩から袈裟懸けにして持ち歩いた。

汪 精衛（兆銘）が大東亜会議出席のため来日し、神戸を訪れた（18.11.5）。汪氏は近代中国建国の父と崇められた孫文の後継者といわれ、蒋介石と抗日共闘していた時期もあったが、意見の違いから蒋介石と袂を分かった。彼は日本が擁立して樹立した新政権の首相に就任したが、歴史的には傀儡政権とされた。敵国日本になびいた漢奸（売国奴）として汚名は解かれることなく、後に日本で客死するのである（19.11.10）。我々学童は兵庫県庁前の電車路の両側で、両国旗の小旗を振って歓迎した。黒塗りの乗用車で東から西へゆっくり

走り去った。

食料事情悪化に伴い、学童の栄養失調解消を目的に始まったのが、学校給食である（18.11）。お椀、皿、箸などの食器を各自、巾着のような袋に入れて持参した。7勺の米飯、味噌汁、それに簡単なおかずといったメニューだった。後にパン食（19.4）もメニューに加えられた。残念なことに、海水浴や修学旅行はこの年から中止になってしまった。

六年生一学期（昭和19年）のころ

担任は平林亀男（男）渾名はヒラガメ。

戦況はますます厳しくなり、米軍の物量の前に日本軍は全戦で圧倒されていった。サイパン島守備隊玉砕（19.7.7）、硫黄島、沖縄と米軍がせまった。

教育の場では戦時色1色となり、改めて皇国日本を再教育するかたちで、天皇は神の子、日本は神国である。「皇御国」「皇御軍」とし国民は天皇陛下のため、国のため戦って忠義をつくさねばならないと説いた。また元寇の故事を引用し「神風が必ず吹く」とか、「本土決戦」「1億玉砕」などといった言葉まで飛び出す始末であった。そして闘争心を鼓舞するため「鬼畜米英」と敵国を鬼畜生呼ばわりして罵り、学校では体操の時間などでルーズベルト（アメリカの大統領）、チャーチル（イギリスの首相）そして蒋介石（支那の総督）の似顔絵を的に空手まがいの突きをやらされたりした。

物不足から菓子類が殆ど姿を消してしまっていたが、健気な少女が、貰った菓子を神棚に上げ「欲しがりません 勝までは」と誓い、菓子に手をつけなかったという、この善行が話題となり少女の言葉が標語となった。学期末に御上は、次代を担う青少年を戦禍から少しでも救おうと、都市部の小学生を山村部、農村部へ疎開させることを命じた。六年生二学期三学期（昭和19年～20年）

のころ

疎開について、我々の小学校では家庭の事情で残留する者、親の縁故の地へ疎開する者、そして集団（学童集団疎開）で疎開する者に分かれた。集団疎開の対象学童は三年生以上であった。私は親の決めた集団で疎開することになった。

六年生の疎開先は兵庫県印南郡（現在の加古川市）東神吉村神吉。男子は常楽寺、女子は眞宗寺（常楽寺の西隣）であった。他の学年はそれぞれ近隣部落のお寺に世話になることになった。準備もそこそこで出発することになったが、しかし生れて初めて親元を離れ旅立つ不安と寂しさ、「親たちが空襲でやられたらどうしよう」など複雑な心境で、悲壮なものだった。我々以上に低学年の子供たちはなおのことで、よく親元を離れる決心をしたと思う。現実には疎開中に空襲で親を喪った子が何人もでることになるのである。

出発の日（19.8.26）に母校で父兄参加の簡単な歡送式が行なわれ、残留組、縁故疎開組の友達と別れを惜しみつつ母校を後にした。現地では村を挙げての歓迎を受けた。

引率の先生は三宅得之先生で集団疎開組全体の統括も兼ねておられた。

我々が御世話になった常楽寺は大きな寺で、神吉城という城跡に建てられた由緒ある寺であった。戦国時代に羽柴秀吉が神吉城に攻め寄せたが、守りが堅くなかなか落ちなかったとか。秀吉は戦法を変え持ち前の謀略を使い、城主の身内の裏切りにより落城したという。吉川英治著の「太閤記」にもその辺の件がある。

さて、いよいよ疎開先での寮生活が始まるわけだが、我々の身の回りの世話を親代わりになってやっていただく、「寮母さん」と呼んだ女性が数人、賄いのおばさんが数人、時々現れ新割りな

ど力仕事してくれるおじさんが一人、この人たちが裏方として我々の寮生活を支えてくれた。

疎開先での生活を追ってみたい。「日常生活は規則正しく礼儀を重んじ 何事も自分で出来る事は自分でやる」と指導された。我々は5～6人単位の班に区分けされ行動することになった。寝床は夏場は本堂で、冬場は奥座敷であった。日課として、朝7時頃「コーンコーン」という木版(いろんな合図に使った)の叩く音を合図で起床。各自夜具を片付け、身支度を済ませて、全員で境内の掃除を行ない、その後境内で朝礼を行なった。朝礼は各班の班長が輪番で進行係を勤めた。皇居及び伊勢神宮に遙拝を行い、「青少年学徒二賜ハリタル勅語」を斉唱し、先生の訓示で締めくくった。朝礼の後本堂に入り住職と一緒に朝のお勤めをおこなった。「般若心経」など二三のお経を上げて終わった。8時頃朝食にありつく、食事は女子も合流して何時も一緒であった。食事の内容は、食べ盛りの年頃であり、質、量共に満足できるものではなかったが、疎開中、先生と住職の尽力、村長はじめ村人の支援により、それほど酷いものではなかったと思う。従って代用食が出されたこともなく、栄養失調者が出ることも無かった。

学業は学校の授業時間と変わりはなく午前と午後に分かれ、本堂や食堂で長机に正座して行われた。稀に村の小学校に向かうことはあったが、殆ど寺で過ごした。自由時間は与えられたが、許可無く寺から外へ出ることは許されなかった。夕食後、予習復習の時間は強制ではないがつけられた。入浴後9時頃に就寝消灯となった。

風呂は当初我々が入る設備がなく、毎日ではないが各班に分かれて近くの農家へ貰い風呂にいった。これがまた大変楽しく嬉しかった。貰い風呂に行くと必ずそら豆、大豆、あらめ等炒りたての物を出していただいた。「親元を離れひもじい思いをしているのであろう」との心遣いであった。我々は「欲しがりません 勝までは」などと言っておれず、いつも有り難く頂戴していた。

我々の学校は集団疎開のモデル校になっていたので、県会議員、市会議

員、市の役人、銃後奉公団体などが視察や慰問に来たり、NHKや新聞社からも取材にやってきた。

NHKの取材は、我々の疎開先での日常生活を順を追って録音していく訳だが、ぶっつけ本番とかありのままといったものと少しかけ離れ、やらせ気味のものを含め、何度もリハーサルを行なった上での録音であった。後日(19.9.23)放送されたが、録音されたものは、全て放送されるものと思っていた先生はじめ我々の期待も空しく、かなりの部分がカットされていたのには、いささかがっかりさせられた。

嬉しいことの少ない生活の中で、父兄の集団面会日は待ちどうしいものだった。二ヶ月に一回ぐらいであったが、その日は朝から皆そわそわと落ち着かなくなった。面会人はほとんど母親であった。親たちは我が子のため無理しているいろいろな食べ物を持参していた。

秋口に村役場の人々が我々のために、寮生活では楽しい事が少なからうと、都会では味わえない事をいろいろ段取りしてくれた。「池さらい」「川さらい」「野うさぎ狩り」「イナゴ捕り」「ひき蛙釣り」など、本当に楽しかった、詳しい話は別の機会に。

世界中をアツと驚かせた「神風特攻隊」が、レイテ沖海戦に出撃(19.10.25)したのがこの頃であった。しかしこの海戦で大日本帝国連合艦隊は、壊滅的損害を被ることになるが、国民は知る由もなかった。大本営発表は、いつも「我軍の損害軽微なり」であった。

さて、冬場になって思わぬ出来事が発生するのである。それは寝小便である。六年生にもなると思われるが、冷え込みが厳しくなった頃の事、毎朝三四人は実行者?が現れた。時を同じくして、シラミが大発生した。日頃寮母さんの行き届いた世話で、それほど不潔な生活をしていない訳ではないが、集団生活では避けられない事件かもしれない。

12月のある日、午後の自由時間に本堂で火鉢を囲んでダベっていた時の事、天井からぶら下がっている飾り物がゆらゆら揺れているのに気が付いた。しばらくして誰かが「地震だ!」と叫んだ。咄嗟に裸足のまま境内に飛び出した。我々は驚えながら一ヶ所に集まり

成り行きを見守った。かなりの時間揺れていたが、その時山門が揺れるように大きく揺れ今にも倒れんばかりであった。この地震が東南海地震(19.12.7)である。

生れて初めて飛行機雲を目撃したのも12月であったと記憶する。疎開地より東方の明石地域には飛行場や軍需工場があり、この方面に小規模ではあるがB29の空襲が始まった頃で、東の空に友軍機のものか敵機のものか定かではないが飛行機雲が見られた。

疎開での生活も残り少なくなった頃、全国の集団疎開の学童ならびに教職員に対し、皇后陛下が「疎開児童に御仁慈」と称して労いの御歌{疎開学童のうへを思いて つきの世を せおふへきみそたくましく た々しくのひよさとにうつりて}と御菓子、同じ世代の皇太子殿下の御佳辰(誕生日)に合わせて御下賜された(19.12.23)我々は恐れ多くも、と有り難く押し戴いた。そんな雰囲気だった。

中学校受験と卒業のため疎開地を離れる時がやってきた。神戸に帰る当日は境内で送別式を行なっていた。入山?した時と同様に住職はじめ寺の家族、村長はじめ村役場の職員、村の小学校の先生方、生徒たちそして村人と、村を上げて歓送していただいた。

振り返って、我々の疎開先での生活はかなり恵まれていたと思われる。他所では食料事情の悪い所が大半で、栄養失調者が続出し、ひもじさのあまり野荒しする者、脱走する者などがあったと聞く。六ヶ月という短い期間であったが、引率の先生に恵まれ、集団生活という得がたい経験をし、その後の私の人生におおきな影響を及ぼしたことは事実である。私の生活態度の変化に、いちばん喜んだのは両親で「疎開に行かせてよかった」と言わしめた。卒業式(20.3.13)の件は先に述べたとおりであるが、ここに来て毎年おこなわれている同窓会の席などでも、卒業式が行なわれたか、否かは両論ありといった有り様である。

卒業してまもなく、神戸に3月17日と6月5日にB29による大空襲があった。この空襲で集団疎開で寝食を共にした学友が大勢爆死した。たまらなく悲しい思いであった。